

世界とつながろう！

所属	静岡県立島田高等学校	実践者	戸塚 康博 (G)
対象	高校生	時間数	3時間(65分×3) + α
場所	同窓会館研修室／教室／台湾	実践教科	教養講座／世界史／修学旅行
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・世界を知る ・世界で活躍する日本人を知る ・自分と世界がつながる進路を考える 		
実践内容	回	プログラム	備考
	1	【ガーナで活躍する日本人】 ガーナ研修帰国報告をし、世界とつながる楽しさを伝えた ①フォトランゲージ…ガーナ人と日本人の写真を見て、会話を予想 ②あるなしクイズ…日本とガーナの写真を見て「あるなし」を見つける →国際協力の必要性に気づく→世界に貢献できることを知る ③世界とつながろう…できることをしよう→温度計を送った→君たちにできることは何だろう ④進路を考えよう…青年海外協力隊の要請一覧を見て、どんな仕事か世界で必要とされているのかを考えた	写真・動画 実物教材 青年海外協力隊の職種要請一覧 PARTNER 国際協力の求人情報
	2	【新・貿易ゲーム】 4タイプの国(先進工業国・新興国・資源保有国・開発途上国)に分かれ、世界経済の動きを疑似体験した ①ルール説明 ②ゲーム実施 ③結果発表、ふりかえり…お互いの立場の違いを理解し、国際協力の必要性を知った	開発教育協会 『新・貿易ゲーム』
	3	【世界がもし 40 人のクラスだったら】 ①大陸ごとに分かれよう…5大陸ごとに分かれて、人口分布を疑似体験した ②世界の富の不均衡…ジュースやクッキーを分配して、世界の富の不均衡を疑似体験した ③世界がもし 100 人の村だったら たべもの編…読み合わせをし、疑問点をあげ、解決方法についてグループで話し合った	『世界がもし 100 人の村だったら』
	+α	【台湾への修学旅行】 現地の高校生と交流し、世界とのつながりを体験した 台湾の良さ、日本の良さを派生図に書いた	修学旅行
成果	<p>機会があるごと、温度計がガーナに届いたこと、ジャムが完成したことなどを小出しにすることで、世界とつながっていることを意識させた。また生徒は実際に海外修学旅行で現地人と交流し、世界とのつながりを体験した。自分はどんな分野で世界とつながるかを考え始めている。</p>		
課題	<p>情報を一方的に与えるばかりの授業になりがちなので、参加型の手法を取り入れ、情報や思考を共有し、さらに体で感じる授業を工夫していきたい。</p>		
備考	<p>「聞いたことは忘れる。見たことは覚えている。経験したことは応用が利く。」という研修で学んだ言葉を胸に刻み、実践していく。</p>		

[授業実践の詳細]

1 時限目「ガーナで活躍する日本人」

1 子どもの活動の流れ

- ① フォトランゲージ
…ガーナ人と日本人が写っている写真の吹き出しに、二人がどんな会話をしているのか予想した。
- ② あるなしクイズ…ガーナの農村(青年海外協力隊員の任地)の写真を見て、日本にあってガーナに無いもの、ガーナにあって日本に無いものをあげた。
- ③ 何が必要か…ガーナの農産物廃棄率が高い村で→農産物加工技術の普及→オレンジジャム・オレンジジュース作りに必要なものは何かを考えた。
- ④ 世界とつながろう…青年海外協力隊員から君たちへのメッセージ動画を見せ、青年海外協力隊員にメッセージを書いた。
- ⑤ 進路を考えよう…JICA青年海外協力隊の職種要請一覧を見て、どんな仕事が必要とされているのか、自分もできそうな仕事の分野を考えた。



この時限のねらい

- 国際協力の必要性を知る。
- JICAを知る。
- 青年海外協力隊を知る。
- 日本人が世界で信頼され、世界で必要とされていることを知る。
- 世界に思いを馳せる。
- 自分と世界がつながる可能性がある仕事を考える。



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ガーナという国に興味を持ってくれた。自分も将来青年海外協力隊員になりたい、という生徒がいた。
- ◇ 以下おもな感想例

- ・電気がないのに、携帯電話(スマートフォン)が普及していることに驚いた。
- ・自分も JICA のような国際的な仕事に就きたいと思っているので、とても参考になった。青年海外協力隊の詳しい仕事も知ることができたので、文理選択の参考になった。
- ・留学したいと思っていたので、自分の将来のことについて考えるきっかけとなった。

3 使用した教材

- <教材1> フォトランゲージ、ほか研修で撮ったガーナの写真多数
- <教材2> アフリカ地図、ガーナ国旗、民族衣装、ガーナで手に入れた実物教材
- <教材3> JICA青年海外協力隊の職種要請一覧

2 時限目「新・貿易ゲーム」

1 子どもの活動の流れ

- ① ルール説明…4人ずつのグループ(国)をつかって、製品を売りお金を稼ぐゲーム。配布する物以外は何も使わない。配布物には、先進工業国・新興国・資源保有国・開発途上国に相当する物しか入っていない。
- ② ゲーム実施…同じ製品の生産過剰による価格の下落、ゴミ増加にともなう課税など、ゲームの流れに変化を与えた。
- ③ 結果発表、ふりかえり…売り上げ額を計算し、感想を出し合い勝因・敗因をふりかえった。他国との意見交換の中で、立場の違いを理解し、協力の必要性に気づいた。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 生徒たちがゲームに没頭していく様子が見てとれた。

- 1) 序盤…ゲーム開始直後に動きはなく、徐々に他国の様子を探るようになり、先進国しかハサミを持っていないことがわかる。資源はあるのにハサミが無くて途方に暮れている開発途上国のさえない表情。一方、ハサミ・コンパス・分度器などなんでも揃って優越感に浸っている先進国は余裕の表情。やがて貸し借りの交渉が始まった。
- 2) 中盤…先進国がハサミと鉛筆を貸すかわりに、途上国は先進国に資源を渡す交渉が成立した。何も動きがない国には、アドバイスをしてまわった。各国とも生産体制が整うと、必死に生産活動に励む。しかし、簡単に大量生産ができる製品(長方形)が過剰気味になったので、長方形の価格が下落したことをアナウンス。すると、高額商品である円や三角を作る国が増えた。しかし、切れ端のゴミも増えていった。そこで紙の切れ端にゴミ税を課すことにした。各国はゴミを最小限に食い止めるため知恵を絞る。なかには、ゴミの切れ端から新商品を開発しようという発想もでてきた。
- 3) 結果…2カ国で同盟関係を結ぶも、先進国優位で結ばれたため、裏切られた開発途上国が不満を持っていた。モノやカネがなくとも、借金をして積極的に行動し、巧みな交渉で成功した国があった。特に開発途上国の立場を疑似体験した生徒は、国際協力の必要性を痛感し、ゲーム後に高い関心を示していた。

◇ ゲームとはいえ、自発的な活動が生まれたことは、座学では見られない光景であった。

3 使用した教材

<教材4>『新・貿易ゲーム』開発教育協会 <教材5>集計表、感想記入用紙

この時限のねらい

- 世界には、先進国～開発途上国のように異なる状況の国々が存在していることを、疑似体験をとおりて理解する。
- 南北問題、国際協力の必要性に気づく。

貿易ゲームの流れ

内容	備考	所要時間
グループ決め ルール説明 袋配布		(10)
ゲーム開始	交渉の様子を観察 動きが無いところに助言 市場に変化、刺激を与える	(30)
ゲーム終了 課税対象調査 集計		(5)
結果発表 各国会議	金額発表 問題分析	(10)
全体会議	問題対策会議	(10)

国名	メンバー	
うさぎ		
所持品	ゲーム前	ゲーム後
はさみ	0	2
コンパス	0	1
分度器	0	0
ものさし	0	0
エンピツ	1	1
紙	20	2
大クリップ (1000ドル)	0	13
小クリップ (100ドル)	2	7
金額合計	a 200ドル	b 13700ドル
税金	-900ドル	売り上げ金額(a-b) 13500ドル
感想	-900 12600ドル	

もう1つ早く動くべきだった。
融資の大切さを知った。
作業効率もよくなった。
貿易することで国が成長した。
資源も大切だ。

3 時限目「世界がもし 40 人のクラスだったら」

1 子どもの活動の流れ

- ① 世界がもし 40 人のクラスだったら…机を後ろに下げ、イスを5大陸ごと案分して並べた。大陸ごと人口分布を案分したくじをひき、大陸に移動した。大陸ごと感想を述べた。
- ② 世界の富の不均衡…世界の富(ペットボトル 10 本・ビスケット 40 枚)を、世界の富の不均衡(シャンペングラス<教材7>)に合わせて配分した。所得層ごと感想を述べた。
- ③ 世界がもし 100 人の村だったらたべもの編…読み合わせをした。疑問点、矛盾などの「？」をあげグループで発表した。その後、解決方法を話し合った。

この時限のねらい

- 世界の格差・多様性を客観的な統計で理解するために、文字や数字だけでなく、疑似体験のアクティビティをとおして理解を深める。
- 世界の不均衡、不平等、富の偏在を知り、原因を追及しようとする。また、国際協力の必要性を知る。

2 子どもの活動の成果・反応

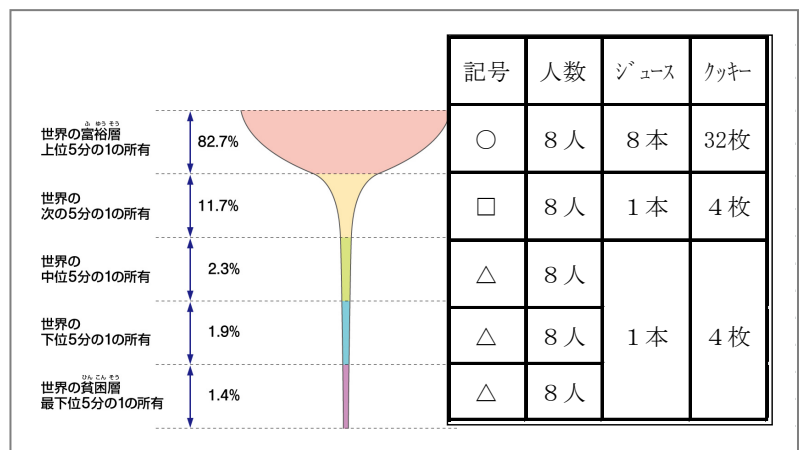
- ◇ 大陸の大きさを示すのにロープを使った事例があったが、教室のイスを使ったことでたいした準備もしないですぐ実践できることがわかった。
- ◇ 数値で統計を理解するより、体験した方が実感できる。生徒はかなりインパクトを受けていた。以下おもな感想例



- ・ アジアはクラス 40 人のうち、イス 13 に 24 人も座って窮屈だった。
- ・ アメリカには富裕層が4人もいたが、アフリカに富裕層は1人もいなかった。
- ・ 世界の経済格差がこんなにもあることを知って驚いた。
- ・ 疑似体験でも、自分が貧しい国だと思うとモチベーションが相当落ちた。他国では大勢の人が毎日を暗い気持ちで生活をしていると考ええると、労働への意欲もわかなくなり、収入が減り、財政も厳しくなるという負のスパイラルに陥るとも考えられる。そういったことをなくすためにも国家レベルでの連携が大切になると思った。

3 使用した教材

<教材6>くじ(役割カード)、ホワイトボード、ペットボトル 10 本、クッキー 40 枚
 <教材7>国際理解教育実践資料集—世界を知ろう！考えよう！—発展途上国の貧困の問題 『資料3 富の偏在化(出所「人間開発報告白書 1992」)』 JICA



<教材8>「池田香代子『世界がもし100人の村だったら』2008、マガジンハウス」「池田香代子『世界がもし100人の村だったら』③たべもの編』2004、マガジンハウス」

『世界がもし100人の村だったら たべもの編』

世界には65億人の人がいますが、もしもそれを100人の村に縮めてくたべもの>のありかたを見てもとどうなるでしょう。

100人のうち、47人は農村に、53人は都市に住んでいます。
畑を耕したり、家畜をそだてたりしてたべものをつくっている人は、20人です。
15人がアジア人、3人がアフリカ人、2人が南北アメリカやヨーロッパなどの人です。
20人のうち、13人はトラクターで、7人は人の力で耕しています。

村人は、食事エネルギーの半分以上を、穀物からとっています。
100人の村人のうち、50人は米を、26人は小麦を、7人はとうもろこしを、あとはいも類などを主食にしています。

村人100人のうち、16人は1年を110万円以上で暮らし、いろいろなものをたくさんたべています。
そのうち2人は日本人で、1年を平均360万円ですらしています。
43人は、1年を64万円で暮らし、きちんとたべています。
41人は、1年を8万円以下で暮らし、ときどきしかたべられません。

■ 全体を通して

1 授業の様子

<写真1>

<写真1> 教養講座: 生徒以外に職員・一般も含め100名近い参加者
<写真2> 高校生・一般参加者も交えてのワークショップに取り組む
<写真3> 世界がもし40人だったらアジアにはこんなにも人がたくさん
<写真4> 富の偏在化を疑似体験、貧困層の現実を知り衝撃を受ける



<写真2>



<写真3>



<写真4>

「新・貿易ゲーム」や、「世界がもし100人の村だったら」をアレンジした「もし〇〇HRだったら」のアクティビティをとおして、開発途上国の弱い立場や、貧困層の苦しさを疑似体験することになった。相手の立場の理解や、国際協力の必要性に気づくことにつながった。

本校は海外修学旅行を実施しているので、台湾の修学旅行とも関連づけて授業を進めた。事前学習で八田與一と、地元静岡県袋井市出身の鳥居信平を取り上げた。両名は台湾のダム建設にあたり、現地の教科書にも載る偉人である。実際に台湾に行き、日本統治時代の名残りや日本への憧れ、日本への感謝を知り、日本人としての誇りや自覚を持つ良い機会となったようだ。台湾と日本、日本と世界の関係を身近に捉え、将来、国際協力の分野に進みたいと考える生徒もいる。自分と世界とのつながりを考えるようになったことが嬉しい。

2 参考文献・資料

- 1)『データブック オブ・ザ・ワールド 2014 世界各国要覧と最新統計』二宮書店編集部(編)
- 2)国際理解教育実践資料集－世界を知ろう！考えよう！－JICA